

幼稚園児に対する食育プログラム開発に関する研究 II：食用家畜という動物達

谷田 創 木場 有紀 金岡 美幸 池田 明子
掛 志穂 州濱美由紀 弓場奈穂子 磯村 亜紀
山中 覚美 土持 陽子 岡野 佳子

はじめに

食生活の乱れが生活習慣病の増加につながっているとして、子どもたちのための正しい食生活について考えようとする動きが活発化している。最近の子どもたちの多くは、「好きなものだけを好きなだけ食べたい症候群」に陥っていると言われ、糖尿病や高脂血症であると診断される子どもたちが年々増えている。このような背景の中で2005年6月に「食育基本法」が制定され、同7月に施行された。この法律は「国民が生涯にわたって健全な心身を培い、豊かな人間性を育むことができるようにするため、食育を総合的、計画的に推進すること」¹⁾を目的としている。食育基本法では、食育を

1. 生きる上での基本であって、知育、徳育及び体育の基礎となるべきもの
2. 様々な経験を通じて「食」に関する知識と「食」を選択する力を習得し、健全な食生活を実践することができる人間を育てること

と定義している。また文部科学省は、この法律の枠組において、「児童生徒が正しい食事の取り方や望ましい食習慣を身につけることなどにより、生涯にわたって健康でいきいきとした生活を送ることができるよう、栄養教諭制度の円滑な実施をはじめ、食に関する指導の充実を図るための取り組みを推進」することとしている。

一方、広島大学生物生産学部附属農場は、平成15年度より広島大学大学院生物圏科学研究科附属瀬戸内圏フィールド科学教育研究センターに改組されたことに伴い、フィールド教育の充実に力を入れており、特に西条ステーション（農場）では、フィールドにおける「食農教育」を積極的に推進している。著者らは、「食農教育」を、「人間が生きて行くために欠かすことのできない食と、それを作り出す農業、そしてそれを支える自然環境に関する知識と、生き物の命に対する

意識を、体験を通して身につけるための教育」と定義し、「食」「農」「環境」「心」をキーワードに、当大学の学生・大学院生だけでなく、地域の幼児から一般市民までを対象として、フィールドにおける体験を通じた幅広い食農教育を展開している。

また著者らは、北欧におけるオルタナティブ農業に関するフィールド調査から、バイオダイナミクス農業に触れ、「農業」と「食」と「教育」との連関について考えるようになった²⁾。バイオダイナミクス農業では、農作業を通して「知」「情」「意」のバランスがとれた人間を育てることも目標の1つとしており、動物や自然と関わる教育プログラムを積極的に取り入れている。「人間によって作りだされた世界を、単なる傍観者としてではなく、直接肌で強く実感すること」がその基本的概念であり、物をつくるということの始めから終わりまで（例えば羊の毛刈りからできあがったものを使うまで）全部の過程を体験することが必要であるとされている³⁾。知とは「頭で考えることができ、必要な知識をもっているということ」、情とは「感情が豊かであるということ」、意とは「意志があって行動できるということ」である。しかし日本の小学校や中学校では「知」偏重の教育となる傾向にあり、その結果、社会における様々な問題を頭では理解できても、行動に移せない人間の増加につながっているのではないかと考えられる。

本研究は、食育とともに「食農教育」に焦点を当て、食農教育プログラムの開発を目標としている。前年度に引き続き、幼児が「食」「食材」「食を支える家畜」をどのように捉えているのかを明らかにするとともに、農場見学を体験した幼児と、体験していない幼児との比較によって、農場体験が幼児らの家畜に対する認識にどのような影響を与えているのかについても調査を行った。

材料及び方法

調査は、広島県内の6つの私立幼稚園の年長児153名を対象として行った。対象となった幼稚園のうち3園の幼児は調査前に、ウシ(乳牛、肉牛)、ブタ、ヒツジを飼養している広島大学附属農場を見学していた。各幼稚園の園児の構成は表1に示した。

表1. 各幼稚園における調査対象者数の内訳、園の背景及び農場見学の有無

| 幼稚園 | 性別 | | 計 (人) | 宗教的 背景 | 農場見学の 有無 |
|-----|----|----|----------|-----------|-------------|
| | 女 | 男 | | | |
| A | 18 | 12 | 30 | 無宗教 | 有 |
| B | 12 | 13 | 25 | 無宗教 | 有 |
| C | 12 | 12 | 24 | 仏教 | 有 |
| D | 7 | 5 | 12 | 仏教 | 無 |
| E | 16 | 16 | 32 | キリスト教 | 無 |
| F | 15 | 15 | 30 | キリスト教 | 無 |
| 計 | 80 | 73 | 153 | | |

調査方法には、幼児に対する個別対面質問法式を採用した。面接官は5人とした。質問は以下の4つの質問群からなり、質問2～4では、各幼児に様々な家畜、料理、食材の写真を見せながら質問した。

質問1では、自宅及び幼稚園にいる動物、動物に対する好き嫌い、好きな食べ物など、幼児の日常生活における動物及び食べ物との関わりについて尋ねた。質問は順に「おうちに動物はいる?」「幼稚園にはどんな動物がいる?」「どれが一番好き?」「好きな食べ物は何?」「嫌いな食べ物は何?」「おうちで食べるのとお出かけして食べるのとどっちが好き?」「どうして?」「お母さんの料理で何が一番好き?」とした。

質問2では、家畜に対する認知度を調べるために、ウシ(乳牛)、ブタ、ヒツジ、ニワトリの写真を提示して「何?」「好き?」「どこにいる?」と尋ねた。ニワトリについてはさらに、2本、3本、4本の脚を持つニワトリの合成写真を示し、「どれが本当?」と尋ねて、正しいと思うものを選択させた。

質問3では、牛乳、卵などの生産物と家畜との関連性をどのように認識しているのかを調べた。牛乳、卵の写真を提示して「何?」「好き?」と尋ねた。さらに牛乳については、8種類の家畜〔ウシ(乳牛及び肉牛)、ニワトリ(全身白色と全身茶色の2種)、ウマ、ブタ、ヤギ、ヒツジ〕の写真を提示しながら、「どれからできてると思う?」と尋ねた。卵については、ニワトリ、ウシ、ブタが卵を生んでいる合成写真、植物に卵がなっている合成写真、卵を選別しパック詰めしている実際の工場のラインの5枚の写真を提示して「どれが本

当?」と尋ね、正しいと思うものを選択させた。

質問4では、料理、食肉、家畜、3者の関連性をどのように認識しているのか調査した。トンカツ、寿司、オムライス、ハンバーグ、カレーの写真を一枚ずつ提示しながら、「何?」「好き?」と尋ねた。さらに、ハンバーグとカレーライスについては、牛肉、豚肉、鶏肉の写真を提示しながら、「どれか入っている?このお料理を作る時にどれか使う?」と尋ね、幼児がいずれかを選択した際には、さらに「これは何?」と名前を尋ねた。加えて、質問3で使用したものと同一8種の家畜と、5種の野菜(トマト、ニンジン、タマネギ、ジャガイモ、ピーマン)及び3種の魚介類(タイ、マグロ、エビ)の写真を示しながら「これは何からできてる?」と、食肉との関連性を尋ねた。

結果及び考察

「おうちに動物はいる?」という質問に対して33.3%(153人中の割合、以下同)の園児が「いる」と回答した(表2)。全国を対象とした調査における、6歳以下の子どもを持つ保護者世帯の動物飼育率27.6%⁴⁾と比較すると、若干高い傾向を示した。しかし、女兒の家庭での動物飼育率は22.5%と低い傾向にあった。

自宅で飼育している動物の中では、クワガタムシやカブトムシが最も多く(18人)、次いでイヌ(12人)、キンギョ(7人)であった。クワガタムシ、カブトムシの人気は男児で高かった。

表2. 園児の自宅での動物飼育率

| 幼稚園 | 女兒 | 男児 | 男女平均 |
|-----|-------|-------|-------|
| A | 27.8% | 58.3% | 40.0% |
| B | 25.0% | 53.8% | 40.0% |
| C | 33.3% | 33.3% | 33.3% |
| D | 42.9% | 40.0% | 41.7% |
| E | 0.0% | 43.8% | 21.9% |
| F | 20.0% | 40.0% | 30.0% |
| 計 | 22.5% | 45.2% | 33.3% |

「好きな食べ物は何?」という質問に対して、66種類の食べ物が挙げられた。日常食べている多くの食品をどのような栄養素が含まれているかによって6つの食品グループに分けた「食品交換表」⁵⁾に基づいて、これらの食べ物を分類した。食品交換表は糖尿病の食事療法に用いるために開発されたものであるが、健常時からこの食事法を行えば、健康的な食生活を行うことができると思われる。

園児の4割近くが「くだもの」を挙げ、次いで2割

が「外食料理」を挙げた。「くだもの」はビタミンを摂取することができ、一見健康的な食べ物であるが、食べ過ぎれば血糖の上昇や中性脂肪の増加を招く恐れもある。また、一般的に外食料理は、主に炭水化物と油脂・多脂性食品によって構成され、味付けも濃く、野菜、海藻類などはほとんど含まれていない。「くだもの」を挙げたのは女兒に多く、「外食料理」を挙げたのは男児に多かった。「くだもの」では、「イチゴ(24名)」が最も多く、次いで「ブドウ(13名)」が挙げられた。

表3. 園児が一番好きな食べ物

(複数回答がみられたため163件の回答中の割合を示す)

| 食品の分類 | 女児 | 男児 | 計 |
|---|-------|-------|-------|
| 表1 穀物, いも, 炭水化物の多い野菜と種実, 大豆を除く豆 ^{※1} | 1.2% | 4.3% | 5.5% |
| 表2 くだもの ^{※2} | 27.0% | 9.2% | 36.2% |
| 表3 魚介, 肉, 卵, チーズ, 大豆とその製品 ^{※3} | 4.3% | 6.1% | 10.4% |
| 表4 牛乳と乳製品(チーズを除く) | 0.0% | 0.0% | 0.0% |
| 表5 油脂, 多脂性食品 ^{※4} | 0.0% | 0.0% | 0.0% |
| 表6 野菜(炭水化物の多い一部の野菜を除く), 海藻, きのこと, こんにゃく ^{※5} | 6.7% | 7.4% | 14.1% |
| 外食料理 ^{※6} | 7.4% | 13.5% | 20.9% |
| 調理加工食品類 ^{※7} | 1.8% | 3.1% | 4.9% |
| 嗜好食品 ^{※8} | 4.9% | 3.1% | 8.0% |

※1 主に炭水化物を含む食品

※2 生のくだものはビタミンの補給に大切であるが、最近のくだものは糖度が高く、血糖の上昇や血中の中性脂肪の増加をまねく場合もある。食べ過ぎないように注意が必要である(干しくだもの、缶詰は嗜好食品に分類される)

※3 主にたんぱく質を含むが、脂質も含まれている食品

※4 植物油, バター, マーガリン, ベーコンなど

※5 主にビタミン, ミネラル, 食物繊維を多く含む食品: 表中唯一, 無制限に食べてよい

※6 ごはん物(カレーライス, オムライスなど), 丼物(天丼, カツ丼など), すし, 弁当, 麺類(うどん, そば類, ラーメン, ミートソーススパゲティなど), その他グラタン, ピザなどを含む: 一般に外食料理では, 表1と表5の食品が多く含まれ, 表6の野菜はほとんど含まれないのが特徴である

※7 パン食, 一品料理, インスタント食品, 調理加工食品: 外食料理と同様の特徴を持ち, 食塩が多く含まれている場合があるので, 注意が必要である

※8 アルコール飲料, 嗜好飲料, 果物の缶詰, 干し果物, 清涼飲料, ジャム, 菓子パン, 菓子類: 原則として糖尿病には好ましくない食品なので, できるだけ飲食しないようにする

「嫌いな食べ物は何か?」という質問に対して, 120

名が嫌いなものを挙げた。嫌いな食べ物として128の回答があり, 分類すると, 最も多かったのは「野菜(75.0%:回答中の割合)」で, 野菜が全般的に嫌いという回答した幼児もいたが, 具体的な種類としては「ピーマン(21.1%)」と「トマト(11.7%)」と回答した幼児が多かった。野菜では他に, ホウレンソウ, ブロッコリー, ネギ, ニンジン, ナス, タマネギ, タケノコ, ゴーヤ, グリンピース, キュウリ, キャベツ, オクラ, アスパラ, レンコンが挙げられた。次いで, トウガラシ, カラシ, ワサビ, 梅干し, キムチなど「刺激のある食べ物(6.3%)」, シイタケ, エノキなどの「キノコ類(3.9%)」, ワカメ, モズクなどの「海藻類(2.3%)」が挙げられた。

「おうちで食べるのと, お出かけして食べるのとどっちが好き?」という質問に対しては, 61.4%の園児がお出かけして食べる方が好きであると回答した。その理由としては, 「楽しいから(19.5%)」「家で食べるよりもおいしいから(17.4%)」「家で食べるよりも料理の種類が多いから(11.0%)」「家とは違う場所で食べるのが楽しいから」「(おもちゃ, ゲームなど)食事以外の楽しみがあるから(各6.1%)」などが挙げられた(全回答中の割合)。その他には「外食だとお手伝いをしなくてもいいから」などの理由も挙げられていた。一方, 家で食べることを好む園児は34.0%で, 「おかあさんが作ってくれる料理のほうがおいしいから(37.5%)」「食後に遊べるから(10.4%)」「自分の好きなものがある, 作ってもらえるから(8.3%)」などが挙げられた。「家族がいるから」「片付けなどのお手伝いをするのがうれしいから」という園児も, それぞれ4.2%いた。「ほんとうは外食が好きだけど, 外食が好きだと言うとお母さんに怒られるから, お家で食べる方が好きだと言うことにしている」と回答した園児もいた。「楽しいから」は3名(6.3%)に過ぎなかった。園児達は, 「いつもと違う場所」で「好きなものだけ」を選んで食べることができ, 食事以外にも楽しみがあるという, 外食のイベント性と外食の味に惹かれているものと考えられる。

保護者が作ってくれる料理がすべて好きであると回答した幼児は7名いた。「選べない, 今は思いつかない」という幼児を除くと, 複数回答を含め, 145の好きな料理が挙げられた。その中では, カレー(15.2%:回答中の割合)の人气が最も高く, ハンバーグ(9.7%), オムライス(4.8%), スパゲティー(4.1%)も挙げられた。

質問2で, 家畜の写真を見せて種類を尋ねた結果を図1に示した。ウシ, ブタ, ニワトリについては, 9割以上の幼児が正答し, ブタではその正答率が100%に

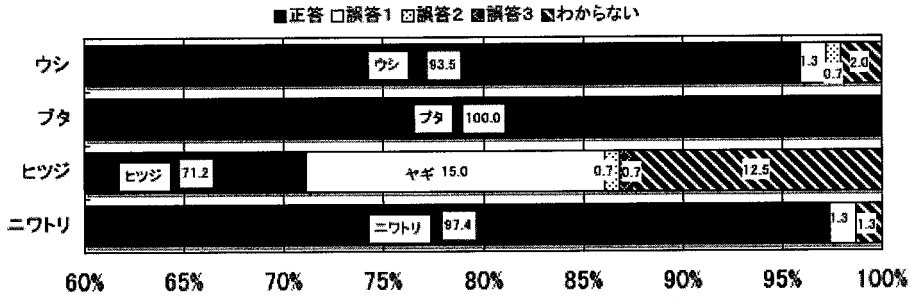


図1. 家畜名の正答率

のぼった。ウシに対する誤答は「イヌ (2名)」、「ウマ (1名)」, 鶏に対する誤答は「小鳥 (2名)」であった。羊については、約3割の幼児は誤答した。その内訳は、15%が「ヤギ」と回答し、「わからない」幼児も12.4%いた。「ヤギ」以外の誤答は、「イノシシ」「めえめえさん」(各1名)であった。

種類を正しく答えられた幼児を対象に、これらの家畜が好きかどうかを尋ねたところ、最も好まれたのは、ヒツジ (78.9%) で、次いでニワトリ、ウシ、ブタの順となった(図2)。また、農場を見学したことのない幼稚園では、「牛肉、豚肉は好きだけど、家畜そのものを好きかどうか聞かれても困る」「べつにどうでもいい」という回答をした園児が見られ、家畜を生命のある対象としては見ていない姿が伺えた。

家畜のいる場所について尋ねたところ、どこで飼育されているか「わからない」と回答した園児の占める割合が、ウシ、ブタ、ヒツジ、ニワトリのどの家畜でも最も多く、「動物園」と回答した園児も多くみられた(表4)。「牧場・農場」と回答した園児がウシでは2割近く見られたが、その他の家畜では1割以下であった。約15%の園児が、ニワトリは「小屋、動物の家、巢」にいると回答し、他の家畜で見られる「広いところ」と回答した園児がいないため、ニワトリは屋内に

閉じ込めて飼うイメージを持っていると思われる。また、ウシやブタでは、工場と回答した幼児も複数いた。中には、日本にはいない、外国にいると回答した園児や、山、森、檻の中にいると回答した園児もいた。

表4. ウシ、ブタ、ヒツジ、ニワトリがいる場所

| | ウシ | ブタ | ヒツジ | ニワトリ |
|---------------------------|--------------------------------|------------------------------|--|---------------------------------|
| わからない | 32.2% | 40.5% | 33.0% | 29.1% |
| 動物園 | 14.0% | 24.2% | 20.2% | 9.5% |
| 牧場・農場 | 19.6% | 9.2% | 5.5% | 4.1% |
| 草のあるところ | 12.6% | 10.5% | 18.3% | 20.9% |
| 小屋、動物の家、巢 | 7.0% | 2.6% | 1.8% | 15.3% |
| 工場 | 2.8% | 6.5% | 0.0% | 0.0% |
| 広いところ | 2.1% | 0.0% | 1.8% | 0.0% |
| 幼稚園、小学校 自宅などの身近 にいる | 0.0% | 0.0% | 0.0% | 6.8% |
| その他の回答 | 日本 じゃない 砂漠 檻の中 山や森 | 日本 屋上 ウシと 一緒に いる | 山 公園 ニュー ジーラ ンド 羊飼いの ところ | 月 ペット ショップ 池 庭 森 |

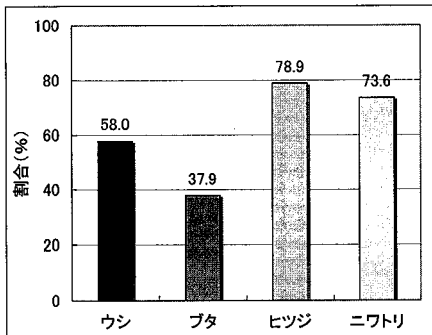


図2. ウシ、ブタ、ヒツジ、ニワトリを好きであると回答した園児の割合

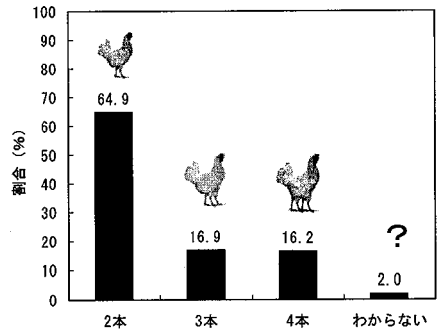


図3. 2本、3本、4本の脚を持つニワトリの写真を選択した園児の割合

ニワトリは正答率が高く(図1)、園児の好感度も高かったが(図2)、2本、3本、4本の脚を持つニワトリの合成写真の中から正しいものを選択させたところ、4本脚、3本脚のニワトリを選んだ園児が合わせて30%以上にもなると、わからないと回答した園児もいた(図3)。

農場見学をした幼稚園(A, B, C)としていない幼稚園(D, E, F)との間で、各家畜に対する正答率に差は見られなかったが、見学経験のある幼稚園の園児の方が、ウシ、ブタ、ニワトリを好きであると回答する割合が有意に高い傾向にあった(ウシ:p=0.0284, ブタ:p=0.0474, ニワトリ:p=0.0004; 図4)。このことか

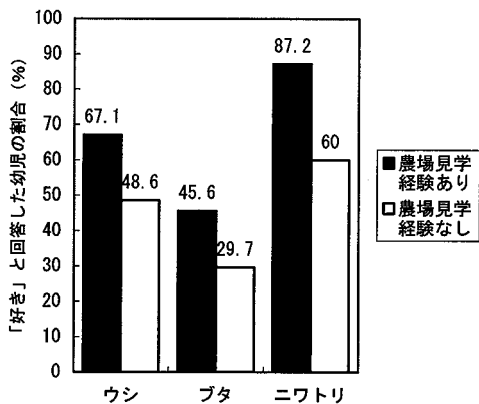


図4. 各家畜を好きであると回答した園児の割合

表5 牛乳、卵に関する質問に対する正答率及び好悪(%)

| | 牛乳 | 卵 |
|--------------|-------|------|
| 名称の正答率 | 100.0 | 98.7 |
| 好き? | 90.2 | 92.4 |
| 生産している動物の正答率 | 94.8 | 90.7 |

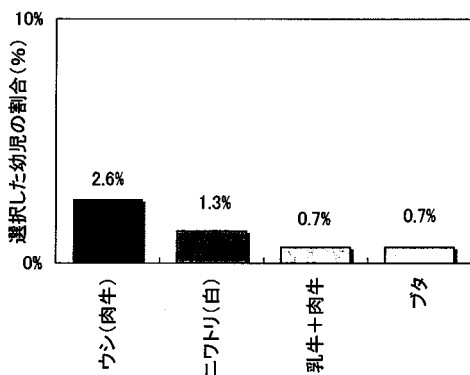


図5. 牛乳とそれを生産する家畜との関連性 (乳牛以外を選択した場合のみを示す)

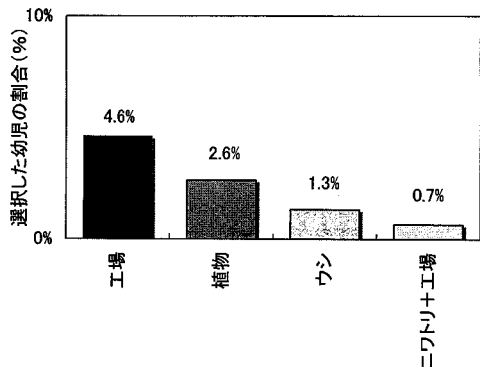


図6. 卵とそれを生産する家畜との関連性 (ニワトリ以外を選択した場合のみを示す)

ら、幼児は農場を実際に見学しなくても、知識として家畜の種類をほぼ正しく答えることができるが、農場を実際に訪れ、家畜を見たり触れたりすることによって、家畜に対する親近感や好ましい印象を持つようになることが示唆された。

質問3で牛乳、卵の写真を提示し、「これ何?」と尋ねたところ、表5の様にほぼ100%の幼児が名前を正しく答えることができた。卵に対する誤答は「ニワトリ」「食べたことあるけど名前が思い出せない」(各1名)だけであった。牛乳と卵の名前を正しく回答した幼児を対象として、「これ好き?」と尋ねたところ、どちらについても約9割の子どもが好きと回答した。牛乳については14名(9.2%)が「嫌い」と回答し、1名が「普通」と回答した。卵については、10名(6.6%)が「嫌い」と回答し(「喘息だから嫌い」の1名を含む)、また、「普通」と回答した幼児も2名(1.3%)いた。9割以上の幼児が牛乳・卵を生産している家畜を正しく選択できたが(正答率 牛乳:94.8%, 卵:90.7%), 中には、牛乳がニワトリやブタから、卵が植物やウシから生産されると認識している幼児もいた(図5, 6)。家畜の名前を正しく答えられる園児は多かったが、家畜のいる場所などについての知識は非常に希薄であることが明らかとなった。

質問4でトンカツ、寿司、オムライス、ハンバーグ、カレーの写真を見せ、名前を尋ねたところ、トンカツを除く4品では、その正答率は約9割に上った。トンカツにおいて名称の正答率が低いのは、「食べたことがないから名前が分からない」という幼児と、「コロッケ」「天ぷら」などの誤答が多いためである。名称を正しく解答した園児を対象に嗜好性を尋ねると、約9割またはそれ以上の園児がこれらの料理を好きであると回答している。

次に、ハンバーグとカレーの名称を正しく答えられた幼児に、牛肉、豚肉、鶏肉の写真を見せ、2つの料理を作る際に、いずれかを使用するかどうか、使用する場合にはどれを使うのかを質問した結果を表6に示した。ハンバーグについては、約半数の幼児が牛肉を、2割の幼児が豚肉を、約1割が鶏肉を選択した。カレーでは約4割の幼児が豚肉を選択し、3割が牛肉、2割が鶏肉を選択した。多くの幼児がこれらの料理が食肉と関連性があると考えていたが、一方で料理の名称は正しく答えられるのにも関わらず「わからない」「どれも使わない」など、食肉との関連性を知らない、あるいは関連性があるとは考えていない幼児が、ハンバーグで約2割、カレーで約1割見られた。

また、食肉の写真を選択した園児に対して、それが何か、名称を尋ねた結果を表7に示した。どの写真を選択した場合でも、名称を正しく答えられた幼児はわずかで、「わからない」と回答している幼児や、ただ「肉」

とだけ回答している幼児が多かった。ハンバーグで牛肉と豚肉の写真を選択した幼児1名は、それぞれの名称を牛肉、豚肉と正しく回答していたが、カレーで3種の食肉すべてを選択した幼児は、牛肉を「肉」、豚肉を「鶏肉」、鶏肉を「わからない」と回答していた。

表6 料理と食肉の関係
(名称を正しく答えた幼児中の割合)

| | 牛肉のみ選択 | 豚肉のみ選択 | 鶏肉のみ選択 | わからない | どれも使わない | 複数選択※1 | その他の回答※2 |
|-------|--------|--------|--------|-------|---------|--------|----------|
| ハンバーグ | 45.5% | 19.7% | 12.1% | 13.6% | 7.6% | 0.8% | 0.8% |
| カレー | 28.9% | 38.3% | 20.8% | 7.4% | 4.0% | 0.7% | - |

※1 ハンバーグ：牛肉+豚肉、カレー：牛肉+豚肉+鶏肉
※2 「ミンチを使う」と回答し、写真から選択しなかった

表7. 選択した食肉の名称

() 内は人数

| 料理名 | 選択した写真 | 名称 |
|-------|--------|---|
| ハンバーグ | 牛肉(60) | 肉(21)、豚肉(14)、わからない(11)、牛肉(7)、ヒツジの肉(1)、ミンチ(1)、何かの肉(1)、ハンバーグの肉(1)、鶏肉(1)、ステーキ(1)、バラ(1) |
| | 豚肉(26) | わからない(11)、肉(7)、豚肉(5)、牛肉(2)、ハム(1) |
| | 鶏肉(16) | わからない(6)、肉(4)、豚肉(3)、鶏肉(2)、刺身(1) |
| カレー | 豚肉(57) | わからない(18)、肉(14)、豚肉(11)、鶏肉(4)、ハム(3)、牛肉(3)、普通の肉(1)、ベーコン(1)、ウシかブタ(1)、カレーライスの肉(1) |
| | 牛肉(43) | 肉(18)、わからない(8)、豚肉(6)、牛肉(6)、鶏肉(3)、バラ(1)、ウシの肉(1) |
| | 鶏肉(31) | 肉(9)、鶏肉(8)、わからない(6)、豚肉(2)、ニンニク(1)、ニワトリ(1)、くし肉(1)、骨が入っている肉(1)、ブタの耳(1)、ウシとかブタのところ(1) |

表8. 食肉と家畜との関係

() 内は人数

| 料理名 | 選択した写真 | 関連があるとして幼児が選択した写真 |
|-------|--------|---|
| ハンバーグ | 牛肉(60) | ブタ(21)、乳牛(14)、肉牛(12)、わからない(3)、ヒツジ(2)、ウマ(2)、ヤギ(2)、ニワトリ(1)、馬とブタ(1)、トマト(1)、タイ(1) |
| | 豚肉(26) | ブタ(10)、わからない(5)、肉牛(4)、乳牛(3)、ヒツジ(2)、タイ(1)、カツオ(1) |
| | 鶏肉(16) | ブタ(6)、わからない(3)、ニワトリ(白)(2)、乳牛(1)、ヒツジ(1)、ヤギ(1)、ニンジン(1)、タイ(1) |
| カレー | 豚肉(56) | ブタ(18)、肉牛(8)、乳牛(5)、わからない(5)、ヒツジ(4)、タイ(3)、ウマ(3)、ヤギ(2)、ニワトリ2種(2)、ニワトリ(白)(2)、ニワトリ(茶)(1)、カツオ(1)、ジャガイモ(1)、どれからもできない(1) |
| | 牛肉(43) | 乳牛(12)、ブタ(11)、わからない(7)、ウマ(3)、羊(2)、タイ(2)、肉牛(2)、カツオ(1)、肉牛・魚・エビ・タイ(1)、肉牛(1)、ニワトリ(白)(1) |
| | 鶏肉(31) | ブタ(7)、ニワトリ(白)(5)、ヤギ(5)、ヒツジ(3)、ウマ(2)、ニワトリ(茶)(2)、肉牛(2)、ニンジン(1)、わからない(1)、タイ(1)、乳牛(1)、ニワトリ2種(1) |

食肉の写真を選択した幼児に、その食肉がどこからできているか、8種類の家畜など計16枚の写真から選択させたところ、どの食肉の写真を選択していた場合でも「ブタ」の写真を選択した幼児が最も多かった(表8)。これは、「ブタは肉になる」と、多くの幼児が考えていることを示していると考えられる。その他の場合は、多くの園児が「わからない」と回答し、選択したとしても生産している家畜を取り違えている園児が多く(例:豚肉→ウシ)、さらには牛肉、豚肉、鶏肉に対応して、馬、ヤギ、ヒツジを選択したり、タイやカツオなどの魚類や、ニンジン、ジャガイモ、トマトなどを選択した幼児もいた。ハンバーグ、カレーライスに食肉が入っていることは、80%~90%の幼児が知っていたが、食肉とそれを生産する家畜とのつながりについての知識は非常に希薄であることが明らかとなった。

結論

畜産物を主材とした料理に対する幼児の嗜好性は高かった。しかし、一方で料理に含まれる食肉と家畜との関わりに対する園児の認識は非常に低いという実態が明らかとなった。

一番好きな食べ物としてくだもの(なかでもイチゴ及びブドウが多い)と外食料理(ご飯もの、丼もの、麺類など、一般的に炭水化物、油脂、肉などのタンパク質を主成分とする)を挙げる幼児が多く、嫌いな食べ物の1位は野菜であった。このことから、幼児は、甘く口当たりの良いもの、味が濃いもの、咀嚼しなくてもよい柔らかい食べ物を好んでいることが分かる。

また、外食料理は、いつもと違う場所で、自分の好きな料理や家で食べるよりもおいしい料理を食べることができ、食事以外にも楽しみがあるという、イベント性と味の点で好まれていたようである。保護者の作ってくれる料理の中でも、カレー、ハンバーグ、オムライス、スパゲティが最も好まれていたが、これらの食べ物も、食品交換表によって分類すると、外食料理にあたるものである。また、寿司、オムライス、ハンバーグ、カレーといった料理の認知度は非常に高

く、9割以上の子ども達がこれらの料理を好んでいた。このことは、近年のファーストフードやファミリーレストランの隆盛が子供の食生活に大きく影響を及ぼしていることを示唆している。

これらの料理に食肉が使用されているということは80~90%の幼児が知っていたが、しかし、使用されている食肉が何からできているかについての知識は非常に乏しかった。さらに、家畜そのものの姿形や、牛乳、卵を生産する動物であるという知識はもっていたが、その家畜がどこにいて、どのように飼育されているのかについての知識は非常に希薄であった。また、農場見学をしたことがある幼児の方が、したことがない幼児よりも、家畜に対して好ましい印象を持っており、見学体験を持たない幼児の中には、「牛肉や豚肉は好きだけど、ウシやブタを好きかどうか聞かれても困る」「別にどうでもいい」と回答している幼児が見られた。家畜の命を頂いているということを知ることが、食の大切さを知る第一歩である。幼児に対しては、「カレーやハンバーグには、牛肉や豚肉が入っていて、牛肉は肉牛から、豚肉はブタからできている」ということを知識として教えるのではなく、生身のウシ、ブタなどの家畜に触れ、その暖かさ、大きさ、匂いなどを五感を通して感じさせ、家畜の命に触れさせることが必要ではないかと考えられる。

引用文献

- 1) 内閣府, 食育基本法, 2006年6月成立(同年7月施行).
- 2) トウラウガー・グロー, スティーヴン・マックファデン(兵庫県有機農業研究会 訳), バイオダイナミック農業の創造, 新泉社, 1996年.
- 3) 子安美知子, シュタイナー教育を考える, 朝日新聞社, 1987年.
- 4) 尾崎裕子, 飼育動物の選択には何が影響を与えるか—日本版総合社会調査を用いて—, *Animal Nursing*, 8:2:12-24, 2004年.
- 5) 日本糖尿病学会(編), 糖尿病食事療法のための食品交換表, 文光堂, 2002年.